

# らい 来ぶらり 46

## あたらしい視界

— 学生の皆さんへ —

図書館次長 種田昭平

最近出版された『大学ランキング'95』（週刊朝日編 朝日新聞社刊）の中に、「図書館にみる大学評価」という項目があって、主要172大学の図書館の評価が載っていますが、それによると本学の図書館は総合で第32位になるそうです。これは恐らく日ごろ皆さんが図書館に持っているイメージ「狭くて暗くて貧弱だ」からは相当かけ離れた評価に違いありません。このランキングが学生一人当たりの「貸出」「受入れ」「経費」のみを物差しとして評価した結果によるものだからでしょう。

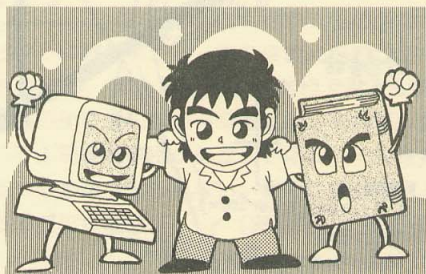
現在の図書館は昭和38年10月に完成しました。以来30年が経過し、建物が古くなったことは当然ですが、規模としても当時より倍以上に増えた学生数には到底対応しきれず、機能的にも急速に進むコンピュータ化を中心とした情報環境の変化について行けなくなっていることは、だれの眼にも明らかでしょう。

私たちとしてもこのような状況を座視していたわけでは決してありません。昭和61年には現状の約2.8倍の規模の「大学図書館増改築案」が学長へ答申されたように、増改築の必要性はことあるごとに訴えてきました。残念ながら力およばず、いまだに実現し得ていないことは皆さんには大変申し訳なく思っています。しかし、これを待っているといつのことになるかわからないので、とりあえず東1号館（旧法経研究棟）へ図書館の事務部門の一部を移転し、本館の利用者スペースを大

幅に広げることを計画しました。1階の第1閲覧室を開架図書室とし、開架図書を倍増することが目玉ですが、このほかにも2階に雑誌室を、3階にグループ閲覧室を2室新設することを考えています。以前好評だった利用者のためのガイダンス、「来ぶらりセミナー」を再開するためのスペースも確保する予定です。できれば今年の夏休み明けには新しく変わった図書館をご披露したかったのですが、種々の事情により来年度からということになりそうです。

また、コンピュータシステムも来年度から新システムへ移行します。検索システムが格段によくなり、キャンパスLANを利用して全学の目録情報を学内のどこからでも検索できるようになります。貸出・返却を機械化するために、開架図書データの遡及入力も始めました。近いうちに利用者登録や借用証記入などの煩雑な手続きなしに、本が借りられるようになるでしょう。

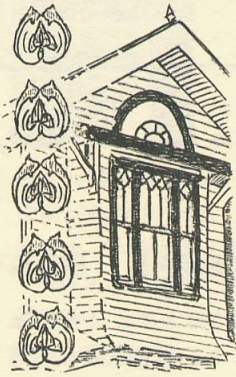
大変歩みは遅いのですが、図書館も少しずつ変わろうとしています。



## 夏の特別企画

# 雑司が谷へ行ってみよう

### 幻の洋館を求めて



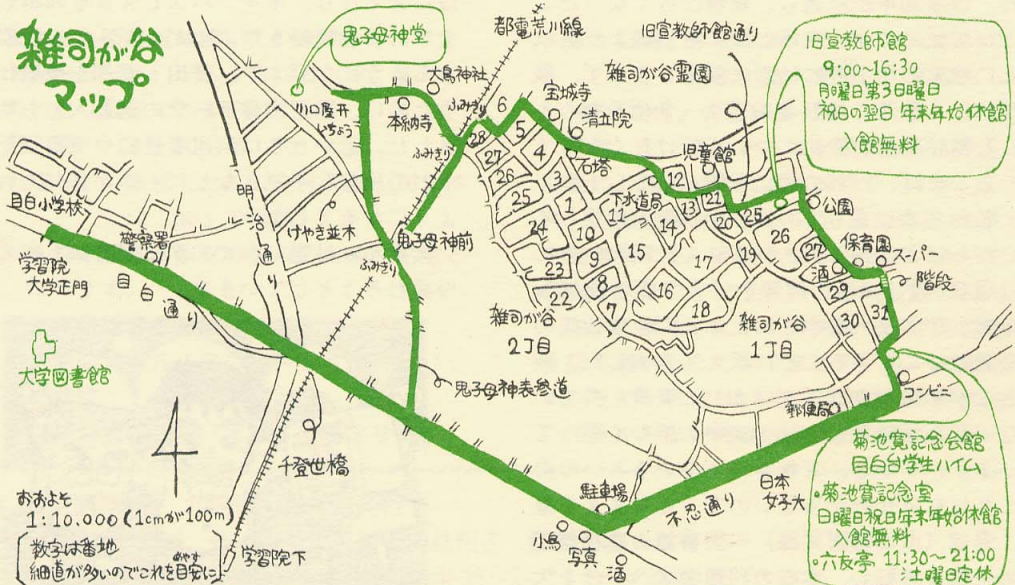
夏の日差しもようやく和らぎ、木立をわたる微風が心地良いとある夕方、幻の洋館を求めて雑司が谷へと足を向けた。都電荒川線鬼子母神前駅の踏切を越え、線路沿いに北上すると小高い丘に行き当たる。この辺りに、かつて「異人館」と親しみを込めて呼ばれた洋館があった。明治36年から大正13年まで、学習院高等科で独語を教えたりチャード・ハイゼの館である。古くからの住民の話では、この洋館は現区立南池袋第2公園（南池袋4-8-5）に、ほんの5〜6年前まで建てていたと言う。外見は3階建てに見える屋根裏部屋付の比較的大きな建物で、グリーンの下見板張の外観が美しかったそうだ。ハイゼが住んでいた当時、辺り一帯は見渡す限りの野

原で、だれ言うともなく“ハイゼの原”と呼ばれてもいた。無論今は、その面影もない。

ここから東へ少し歩いた雑司が谷1-25-5には旧宣教師館がある。明治40年、アメリカ人宣教師ジョン・ムーディー・マッカーレブが自らの居宅として建てたもので、区内に現存する最古の近代木造洋風建築であり、区の有形文化財の指定を受け一般に公開されている(3985-4081)。敷地内には雑司が谷教会や雑司が谷学院なども建てられたが、今は居宅だけが、そこだけ異空間のように佇んでいる。

この旧宣教師館の裏手に回り、今来た道とは反対に坂を下り不忍通りに出る手前、今は目白台学生ハイム（雑司が谷1-32-5）になってしまったが、ここには作家・菊池寛が住んだ2階建て洋館があった。このビルの1階にあるレストラン「六友亭<sup>りくゆうてい</sup>」で、菊池寛の好物だったカツサンドを注文し、よく冷えたビールを飲みながら“異人”たちに思いを馳せる。コンクリートのビルに囲まれたこの地で、かの文豪もすでに“異人”のようである。やがて外に出ると、夕立の予兆のように、雨の香りがほほに伝わった。（洋書係 中山高二）

### 雑司が谷マップ



## 鬼子母神あたり

江戸の昔より庶民の物見遊山の地として、名高い場所のひとつ、雑司が谷鬼子母神は、本学から眼と鼻の先にある。

学習院正門を出て右に折れ、千登世橋から二つ目の四辻を左に曲がる。商店街を少し進み、都電の踏切を渡ると、右前方に参道の櫛並木が見える。樹齢数百年の古木は数本になったが、突き出たこぶに歴史を感じる。寛政から化政年間には、この並木の両側に料亭や茶店が軒を並べ、参拝客でにぎわったという。うっそうと葉が茂り、緑陰の良い散歩道である。境内にある「子授け公孫樹」と崇敬されたイチヨウの巨樹と共に、都の天然記念物に指定されている。

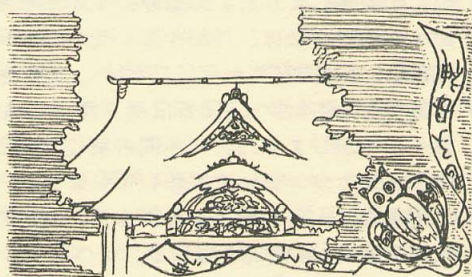
境内の奥にある鬼子母神堂は、都指定有形文化財。本・幣・拝殿が権現造を構成する豊島区内最古の建造物である。ここに鬼子母神像が納められている。

鬼子母神は人間の子をさらっては食べる鬼女であった。親たちの嘆きを見兼ねた釈迦如来が鬼女の子を隠し、その非を論すと、鬼女は改心し、子授けと安産の神になった。雑司が

谷鬼子母神は天衣・瓔絡をつけ、吉祥果を持ち幼児を抱いた菩薩形の美しい姿をしているので、ツノのつかない“鬼”の字を用いている。

拝殿には、都指定有形文化財の鳥山石燕画「大森彦七」、二代目鳥居清満画「三人静白拍子」のほか、江戸時代の絵馬が多く残されており、一見の価値がある。境内にある駄菓子屋「川口屋」は、江戸時代から続く老舗。東京の数少ない郷土玩具である“すすきみみずく”は、この店でも買える。

鬼子母神の参道を出て右に折れると前述の櫛並木だが、まっすぐ小路を進むと、本納寺や大鳥神社を訪れることができる。さらに先には雑司が谷霊園がある。ぶらりと歩いてみませんか。（雑誌係 石田京子）



## 書物の風景

40

図書館で仕事をしていると、ある人の随筆を探すが意外と難しいと思うことがある。だから、『日本の名随筆』（作品社刊）を手にとると、よくもまあこれだけの随筆をテーマ別に探し出したものだと感心させられてしまう。

『日本の名随筆』は1983年2月から刊行され、

全100巻完結後、現在別巻が続刊中で、花・死・性・酔・貧など漢字1字（別巻は2字の熟語）をテーマと

して、近・現代の作家をはじめとする各界の著名人の随筆約4,000編を収録したアンソロジーだ。テーマは見事に日本人の心をそそるものばかり。さらに編者とのとり合わせが実に絶妙で、どことなく“遊び”を感じさせる。

41「嘘」（筒井康隆編）には、架空の人物の住

所録を作ろう（尾辻克彦）、男のウソ（田辺聖子）など、49「父」（山田太一編）には、女学生のころ（萩原葉子）、父親（山田洋次）などが収録され、樋谷雄高編「夢」、桂米朝編「笑」、森瑤子編「男」、安野光雅編「数」など、ついあれこれと手を伸ばしたくなるテーマや編者が揃っている。テーマの言葉に誘われて読んでいくうち

に、言葉のイメージが次第にふくらんでいくようだ。

それぞれの随筆は、著者の人となりや人生の機微・

エピソードが柔らかく、時には鋭く伝わってくるものあり、笑いを誘うものありで味わい深い。眼の前に並んだテーマを眺め、その時々での思いで1冊を拾い出すのが、このシリーズを数倍楽しむ方法かもしれない。書庫に納められているのが少し残念だ。（洋書係 工藤晶子）

つい誘われて

『日本の名随筆』

# ことしのニュースタッフ

## ベテラン再登場



10年ぶりに大学図書館へ復帰いたしました。

図書館は、この10年間にコンピュータ化が進み大きく変わりました。資料検索が、カード目録検索からオンライン目録検索に変わり、大変便利になりました。資料が図書館にない場合でも、学内は元より学術情報センターデータベースの検索で、瞬時に全国規模の所蔵調査ができるようになり、図書館間の相互協力が発展しました。ちなみに本学から他館への依頼件数は、1983年度と比べ1993年度には、閲覧391件から1,157件へ、文献複写92件から270件へ、図書借用0件から135件へと増加しました。10年間の変化のめざましさをカウンターで実感しています。

図書館サービス向上をめざして、微力ですが頑張りたいと思います。

(運用課長 越川孝昭)

## よろしくおねがいます



図書館に足を踏み入れて、まずみなさんが目にする図書館員は、カウンターにいる人たちです。しかし、その裏でもたくさんの方が動いています。みなさんが1冊の本を手にするまでには、その本は選択→購入→整理→排架という長い道のりを経てきているのです。

私はこの春より、その道のりの途中にある、整理を担当することになりました。みなさんが最近の本(資料)を探す時、従来のカードではなく、端末で検索ができるように、1冊ずつデータ入力していくのです。しかし、これがなかなか一筋縄ではない場合があるようです。

本(資料)は、それを手に取る人があって初めて生きてきます。その両者をとりもつために、がんばっていきたいと思います。

(和書係 富田正貴)

## お知らせ

○夏休みも図書館は開いています。

7月21日(木)から9月14日(水)まで、次のとおり利用できます。

平日 8:50~16:30

土曜日 休館(ただし9月3日・10日は12:00まで開館)

※9月5日は事務室の引越のため、閉館となります。

○夏休み長期貸出が始まります。

取扱期間:7月7日(木)~9月14日(水)

返却期限:9月19日(月)以降

※返却期限は貸出日によって異なります。

貸出冊数:学部学生……………5冊まで

院生・論文貸出……10冊まで

○「論文貸出」の登録受付中

卒論・ゼミ論のテーマが決まった4年生を対象に、通常の貸出とは別枠で「3冊、1か月」の館外貸出をおこなう「論文貸出」の登録を受付中です。手続きは2階カウンターで。

○お分かりですか?資料のさがし方

学内で所蔵している資料はすべて図書館の目録で調べることができます。カード目録・オンライン目録(端末機での検索)の利用について分からない時は係員におたずね下さい。

来ぶらり No.46 1994年7月1日発行

発行責任者:片瀬 潔 編集委員:小林邦子 篠原三佳

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03(3986)0221